

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

西国分寺地区(旧国鉄中央鉄道学園西側跡地)
特定住宅市街地総合整備促進事業に伴う
平成5年度発掘調査概報 I



1994.3

西国分寺地区遺跡調査会

報告書抄録

ふりがな	むさしこくぶんじあとほくせいちくのいせき							
書名	武蔵国分寺跡北西地区の遺跡							
副書名	西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）特定住宅市街地総合整備促進事業に伴う平成5年度発掘調査概報 I							
編著者名	秦正博・坂詰秀一・持田友宏・早川泉・有吉重蔵・板野晋鏡・滝島和子							
編集機関	西国分寺地区遺跡調査会							
所在地	〒185 東京都国分寺市泉町2丁目1番地				TEL 0423 (25) 1767			
発行年月日	1994年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ・ ・ °	東 経 ・ ・ °	調 査 期 間	調 査 面 積 ㎡	調 査 原 因
		市町村	遺跡番号					
むさしこくぶんじ 武蔵国分寺	とうきょうと 東京都	13214	No. 19	35° 41' 08"	139° 28' 04"	平成5年 11月15日 ～ 平成6年 3月31日	9,091 ㎡	西国分寺地区 特定住宅市街地 総合整備促進事業 に伴う事前調査
あとしほくせいちく 跡北西地区	こくぶんじし 国分寺市							
ひかげやま 日影山遺跡	いづみちやま 泉町2-1		No. 9					
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
武蔵国分寺 跡北西地区	集落跡	江戸時代	土坑墓	古銭				
		奈良平安時代	土坑溝跡	須恵器 土師器 瓦				
日影山遺跡	集落跡	縄文時代	集石跡 土坑 陥し穴	縄文土器 石器				
		旧石器時代		石器				

表紙：調査前の鉄道学園跡地

(平成3年4月, (株)こうそく撮影)

序

本調査は西国分寺地区特定住宅市街地総合整備促進事業に伴い、国分寺市からの委託を受け実施しているもので、今年度の調査は平成8年度までの4か年計画の初年度に当たります。

当該地は、南東に位置する国指定史跡武蔵国分寺跡の外郭に広がる集落跡に連続する台地上にあり、また縄文時代中期の日影山遺跡の南端にも当たり、遺跡地図では両遺跡の重複点に位置しています。

事業に先立つ平成2・3年度に実施された試掘調査では、調査区の東端近くをほぼ南北方向で通過する推定東山道の一部が明らかにされています。このため、調査は先の武蔵国分寺跡の外郭集落の北への広がり、推定東山道とのかかわりを明らかにする事を主な目的とし、併せて日影山遺跡の南への広がり、調査区と現府中街道を挟んで南北に通過する中世の幹線道として知られる旧鎌倉街道（上道）との関係の解明などをも目的に実施しています。

今年度の調査は、平成5年11月開始と言う事もあって、全調査対象面積約6.7haの内0.9haを対象に実施しました。結果は、調査区の東半分が既存のグラウンド整備に伴う大幅な削平のため、遺構の検出量は微弱ではありましたが、日影山遺跡にかかわる遺構、遺物と後世の溝の他、旧石器に属するナイフ形石器や、中世の陶磁器片も若干検出され、新たな知見を得ることができました。

本書は平成5年調査の概要を示したものです。遺跡全体の詳細については、未だ調査の緒についたばかりで今後に委ねるところですが、武蔵野台地の歴史に新たな頁を加えることができれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施に当たって国分寺市役所開発二部の方々を始め、関係各位のご理解と多大なご協力を得ることができました。ここに記して謝意を表します。

平成6年3月25日

会 長 秦 正 博

序

武蔵国分二寺は、僧・尼寺を一体として企画された壮大な伽藍として、国府の北方に建立された。僧寺を東、尼寺を西に配した一体化伽藍は、造寺司のもと僧寺の造営から着手され、ついで尼寺に及んでいったが、その初期における建築関係の工房的施設は、僧寺の西北方、尼寺の北方地域に配されていた実態が次第に明らかにされてきた。僧寺と尼寺の中間地域、尼寺西北方の台地上の地域には、それぞれ初期の造営に関する遺跡が発掘されてきたことはよく知られている。

それらの地域には、国分二寺の完成後も引きつづき集落が形成されていたことが判明しているが、平面的構成は必ずしも明瞭に把握されることなく近年にいたった。

現在、発掘が行われている武蔵台東遺跡（尼寺北方地区）の調査結果は、漆紙文書を出土した武蔵台遺跡（尼寺西北方地区）と共に、きわめて注目すべき内容を有し、国分二寺の造営と展開にまつわる背景を鮮明にする役割を果たしつつある。かつて試みられた僧寺北方地区における一連の発掘ともども、二寺の北方地域における集落のあり方を窺う上に貴重な資料を提供するにいたっている。

この度、旧国鉄中央学園跡地の開発計画に先行して発掘が行われることになった地域は、僧寺の寺域北辺（溝）から北に約210mに位置している。すでに試掘調査によって、旧石器時代・縄文時代・奈良平安時代の遺物が出土していたが、とくに奈良時代の東山道と考えられている道路遺構が調査地の南北を貫通していることが判明していた。また古代の東山道の西側には、中世の鎌倉街道がほぼ並行して存在していることも予想されていたのである。

古代～中世、さらには近世にかけての道路遺構の存在は、それらを考古学の立場から調査し得る絶好の条件にめぐまれていたのである。加えて、奈良平安時代における集落が国分二寺の北側にどのように展開していたのかを知るにも注目され、また本地域の北方に存在する縄文時代の日影山遺跡の拡がりを見るためにも注視されてきた地域でもあった。

以上のような問題点を踏まえて本年度の調査が実施された。6.7㊦の内、0.9㊦を対象として発掘が行われ、新たな知見を得ることが出来た。この結果は明年度以降における発掘に大きな手掛かりとなったのである。

平成6年3月25日

団 長 坂 詰 秀 一

例 言

1. 本書は、西国分寺地区特定住宅市街地総合整備促進事業に伴う平成5年度発掘調査概要報告である。
2. 本調査区は、東京都国分寺市泉町2丁目1番地（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）に所在する。
3. 調査は、国分寺市役所開発二部、東京都住宅局、東京都住宅供給公社、住宅・都市整備公団の委託を受け、西国分寺地区遺跡調査会が実施している。
4. 本書は、坂詰秀一団長の指導の下、持田友宏参与・早川泉参与の助言を得て、調査員板野晋鏡・滝島和子が編集・執筆をし、概報作成班が作成した。尚、執筆者名は文末に記した。
5. 「Ⅲ. 試掘調査」は、有吉重蔵氏（国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長）に執筆して頂いた。氏のご好意に感謝を申し上げたい。
6. 本書の内容は、平成6年3月31日に於ける整理段階のものである。
7. 発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や諸機関より御指導・御協力を頂いた。
有吉重蔵・近藤滋・福田信夫・上敷領久・上村昌男・河内公夫・西野善勝・杉浦由恵・品田圭二・小川将之・徳永俊夫
東京都教育委員会・国分寺市教育委員会・国分寺市遺跡調査会・都立府中病院内遺跡調査会・都営川越道住宅遺跡調査会・武蔵国分寺関連遺跡調査会・(株)こうそく・加藤重機建設(株)

目 次

報告書抄録	表紙 2
I. 遺跡の環境	4
II. 調査に至る経過	7
III. 試掘調査	8
IV. 調査方法	10
V. 調査経過	11
VI. 層序	12
VII. 旧石器時代	13
VIII. 縄文時代	14
IX. 歴史時代	20
X. 道標銘のある地藏碑	26
XI. 総括	28



▲ 国分寺駅ビルより調査区を臨む

凡 例

※ 遺構は発見順に連続番号を付し、下記の略称を冠して表記している。

SD	—	溝跡・溝状遺構
SS	—	集石跡
SK	—	土坑跡
SX	—	特殊遺構
P	—	小穴

※ グリッド線に付した距離は、僧寺中軸線中心点（金堂と講堂との間）からの距離を表す。

I. 遺跡の環境

本遺跡は、JR中央線西国分寺駅の南東、東京都国分寺市泉町2丁目1番地に所在し、北方に恋ヶ窪谷、南方に国分寺崖線を臨む、標高約79メートルの武蔵野段丘面上に位置している。

野川の開析谷である恋ヶ窪谷には数々の湧水地が点在しており、遺跡北東崖下にも現在では枯渇しているが、湧水地点が存在し、他の湧水と共に野川の源となっている。また、遺跡南方の国分寺崖線沿いにも幾つかの湧水地が存在し、湧水は崖線下を削りながら東流し野川と合流している。更に流れは、崖線沿いに小金井・三鷹方面へと続き、世田谷区二子玉川付近で多摩川に注いでいる。

本遺跡の南東方向、国分寺崖線下には、国の史跡に指定されている「武蔵国分寺跡」が在る。遺跡は、金堂・講堂跡を中心に南北約1.5キロ、東西約2キロの広がりを持っており、本調査区は、北西地区角に含まれている。また、試掘調査の結果、側溝を持つ幅12メートルの古代の道路跡（推定東山道跡）が、調査区東端を南北に通っているのが確認されている。本年度の調査では国分寺跡に関連する遺構は確認できなかったが、来年度以降の調査には、国分寺を取り巻く集落の北限、東山道沿いの土地利用法などを考える上で、大きな期待が寄せられている。また、本調査区は、北接する縄文時代中期の遺跡、日影山遺跡の南端に一部含まれており、本年度の調査に於いても縄文時代の土器片・石器等が多数出土している。

本遺跡の周辺には、学史上著名な遺跡が数多く点在しており、恋ヶ窪谷を挟んで北側には、恋ヶ窪遺跡、羽根沢遺跡、その南には恋ヶ窪南遺跡等がある。また、府中街道を挟んで北西には恋ヶ窪廃寺跡、南西国分寺崖線沿いには、多喜窪遺跡、武蔵台東遺跡、武蔵台遺跡、多摩蘭坂遺跡、南方崖下には武蔵国分尼寺跡が在る。

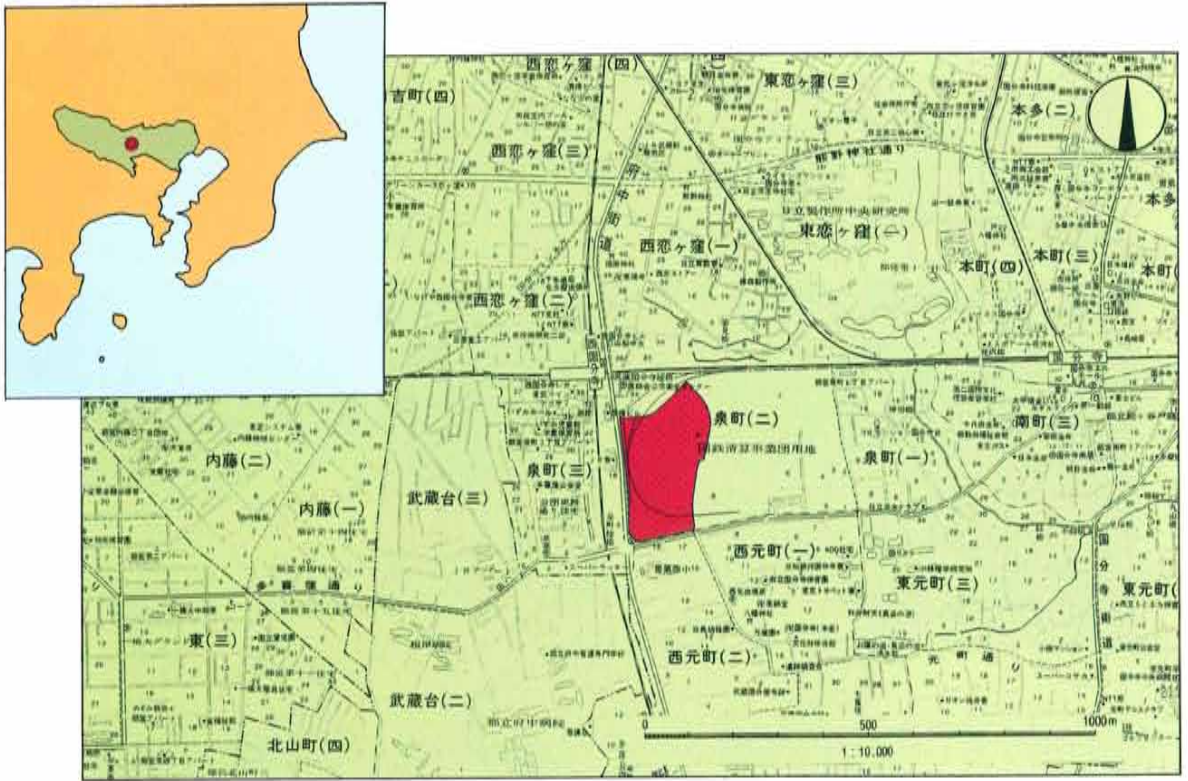
（板野 晋鏡）



▲ 調査区から日影山遺跡を臨む

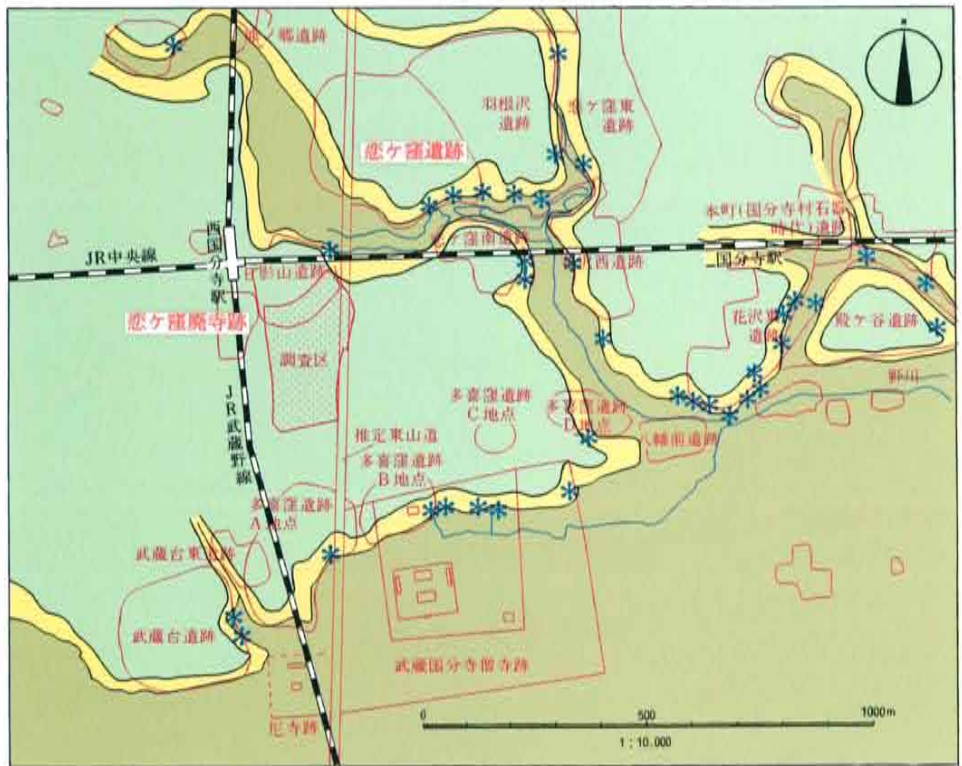


▲ 武蔵国分僧寺跡



調査位置図

- 凡 例
-  = 国分寺崖線
 -  = 湧水地点
 -  = 周辺の遺跡



国分寺市史 上巻より

周辺の遺跡と崖線及び湧水地点

調査地区周辺の移り変わり

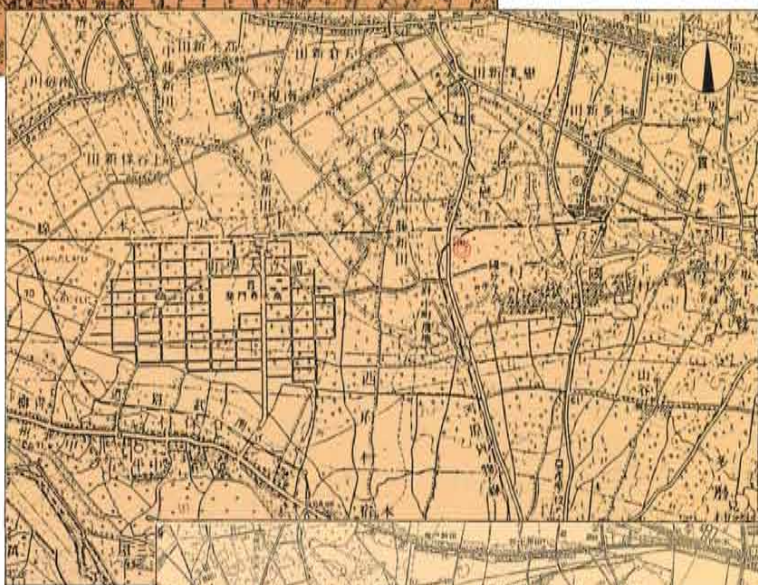
◎ 調査地点

S = 1 : 25000



◀ 明治42年頃

▶ 大正12年頃



▶ 昭和43年頃



国土地理院 地形図より

Ⅱ. 調査に致る経過

旧国鉄民営化の中で、中央鉄道学園跡地は国鉄清算事業団の売却資産として売り出される事となった。跡地利用については、民間企業の参入も含めて、多くの意見があったが、公共用地としての活用が図られることとなり、用地の西側 67,000㎡については国分寺市・東京都住宅局・住宅供給公社・住宅都市整備公団の四者による特定住宅市街地総合整備促進事業として開発が実施されることとなった。

本地域に遺跡が存在することは、東京都遺跡地図に明らかであるため、国分寺市教育委員会は開発計画策定にあたって、「埋蔵文化財の内容を把握し、文化財保護上必要な措置をとるための基礎資料を得る」ために、予備調査を平成3年8月14日から12月6日まで実施した。調査の結果は当初の想定どおり、ほぼ全域に遺物の分布が認められることが明らかにされた。

この結果を基にして国分寺市教育委員会は東京都教育庁文化課埋蔵文化財調整係と調査体制について協議を重ねた結果、平成5年9月文化課埋蔵文化財調査係に調査依頼があった。

平成5年10月7日、施工四者と国分寺市教育委員会、東京都教育庁文化課埋蔵文化財調査係との第1回目の調整会議を行い、調査予算、調査工程、調査体制について了解に達した。

平成5年10月27日、西国分寺地区遺跡調査会設立準備会並びに第1回役員会を開催し、11月15日より調査を開始した。（早川 泉）



▲ 調査前風景（西から）



▲ 調査前風景（北から）



▲ 調査前風景（南から）



▲ 調査前風景（東から）

◀ 昭和22年
米軍による空中写真

Ⅲ. 試掘調査

調査の目的

中央鉄道学園跡地は、昭和53年以来断続的に実施されてきた発掘調査によって遺跡の内容が次第に明らかにされてきたが、調査対象地が敷地の中央南部に偏在していることもあって敷地全体の内容を把握するまでにはいたっていなかった。

昭和62年4月の国鉄民营化に伴う売却候補地に中央鉄道学園跡地が含まれたことで、以降、学園跡地における開発計画の策定が進められることになったが、同時に遺跡の取扱いが重要な課題となった。

そこで、土地所有者の日本国有鉄道清算事業団の協力を得た国分寺市の委託を受けて、国分寺市遺跡調査会（会長 星野亮勝）が公園予定地（学園跡地南東部）を除いた地域16.7haを対象に、遺跡の内容把握と、文化財保護上必要な措置を取るための基礎資料（種類・内容・分布状況・数量・地表からの文化財の深さ・遺物包含層の状況等）を得る目的で平成3年8月14日から12月6日まで試掘調査を実施した。

調査の方法

調査方法は、対象地が16.7haと広大なことから武蔵国分寺跡の発掘調査基準線を基に、27mおきに3m四方の試掘坑を240ヶ所、推定東山道跡想定線上では東西方向に3×30mの試掘トレンチを3ヶ所設定することを基本としたが、樹木及び建物基礎等の障害物によって試掘坑が10ヶ所減り、最終的には233ヶ所（2,344㎡）となった。時代別の調査面積は次の通りである。

旧石器時代 162㎡（18ヶ所）

縄文時代 1,404㎡（156ヶ所、調査対象面積の約0.84%）

奈良・平安時代 2,250㎡（233ヶ所、調査対象面積の約1.50%）

なお、遺構確認は概ね縄文時代はⅢ_a・Ⅲ_b層上面、奈良・平安時代は第Ⅱ層上面で行い、旧石器時代はⅧ～Ⅹ層まで掘り下げを実施した。

発見遺構と出土遺物

旧石器時代 遺構は、試掘坑18ヶ所の内、旧クラブハウス東側テニスコートの1ヶ所で第Ⅲ層部下から第Ⅳ層上部にかけて石器集中部が1ヶ所発見された。遺物は、旧クラブハウス東側テニスコート及び旧総合運動場北東スタンドの2ヶ所からナイフ型石器1点、刃部剥片石器2点、チップ3点が出土した。



1. 試掘調査状況（西から）



2. 旧クラブハウス東側テニスコート内発見旧石器時代石器集中部（南から）



3. 旧野球場北接道路発見推定東山道跡手前から2条目が西側溝、同4条目が東側溝（西から）

縄文時代 遺構は、試掘坑156ヶ所の内60ヶ所から土坑23、集石跡2、小穴94、不明遺構1が発見された。遺物は、51ヶ所から土器片588点（内早期41点、中期212点が主体）、石器51点（打製石斧14、搔器14が主体）、礫468点が出土した。

奈良・平安時代 遺構は、試掘坑233ヶ所の内14ヶ所から溝跡8、道路跡（推定東山道跡）1、土坑9、小穴4、不明遺構3が発見された。遺物は8ヶ所から土師器片18点、須恵器片4点、灰釉陶器片1点、瓦2点、時期不明陶器片2点が出土した。

調査の結果

旧石器時代 これまで当該期の遺構・遺物は確認されていなかったが、北側の谷を望む旧クラブハウスの周辺部において石器集中部1ヶ所が発見され、さらにナイフ型石器や刃部剥片石器が出土したことで当該期の遺跡の存在が初めて確認された。これらは、市内の先土器時代遺跡の第Ⅱ文化期に属するものである。

縄文時代 学園跡地は、北東部に早期末および中期前半の竪穴住居跡等が調査された恋ヶ窪南遺跡、北西部に採集された土器から恋ヶ窪南遺跡とほぼ同時期と考えられる日影山遺跡が所在する。このような遺跡の立地から、当該期の遺構が学園跡地北半部に多く発見されることが推測されていたが、竪穴住居跡こそ発見されなかったものの推測どおり集石跡・土坑・小穴が跡地北半部に集中し、跡地南半部は散在することが明らかになった。

また、これらの遺構の時期は出土土器から早期末から後期にわたることが明らかになったが、その出土傾向をみると出土量が多い早期末と中期（初頭を中心）は跡地北半部の旧クラブハウス付近から東端にかけて、出土量が少ない前期と後期は前者が東端と野球場南西付近に、後者が旧クラブハウス付近と東端に、各々集中することが知られる。

跡地北半部の旧クラブハウス西側の総合運動場は、第Ⅳ層上部まで削平されていることもあって遺物は全く出土していないが、総合運動場建設工事の際に早期末と中期（初頭を中心）土器が採集されている。こうしたことから、当該期の遺構のあり方は、早期末と中期初頭をその中心時期として、北半部は日影山遺跡および恋ヶ窪南遺跡を拠点に集中するように分布し、南半部は各時期が散在することが想定される。

奈良・平安時代 学園跡地は、武蔵国分僧寺の寺域北辺溝から北に約210m離れて位置し、これまでの調査によって国分寺関連の遺構が存在することが明らかになっていた。調査の結果、道路跡（推定東山道跡）、溝跡、土坑、小穴等が発見されたが、推定東山道跡は、旧クラブハウスと野球場の中央を結ぶように南北に通っていることが確認された。この道路跡を除く遺構の大部分は、道路跡に沿うように周囲に散在している。

また、今回の調査で竪穴住居跡は発見されなかったが、過去の調査で、北は旧野球場南端の30m付近まで東は跡地東端まで、西は旧野球場西端の西30m付近まで発見されており、武蔵国分寺を取り巻く集落の北限がこの付近であることが推定されている。

こうしたことから、当該期の遺構のあり方は、跡地南端部付近の集落北北限付近および推定東山道跡付近に集中し、これ以外の地域は散在することが想定される。 （有吉 重蔵）

IV. 調査方法

- ◎ 調査総面積 67561.92㎡
- ◎ 調査期間 発掘・平成5年11月 ～ 平成8年11月末
整理・平成8年12月 ～ 平成11年3月末
- ◎ 調査方法

1. 調査区を便宜上、A(1区・2区)・B・Cの3区に分け、それぞれ1年毎に調査する事とした。本年度の調査は、A-1区(9091㎡)である。

※ 来年度より、A-2区・B区・C区の順に調査する予定であったが、平成6年2月に開発事業の内容に一部変更があったため、来年度以降の調査は、上記調査区とは無関係に各年度毎の調査面積比に基づいて調査することとなり、調査の便宜上、年度毎の調査範囲を、それぞれ1区、2区、3区、4区と呼称する事とした。調査区分は、下図に示す通りである。

2. 表土は全て機械掘削とし、包含層の掘削は手掘りで行った。

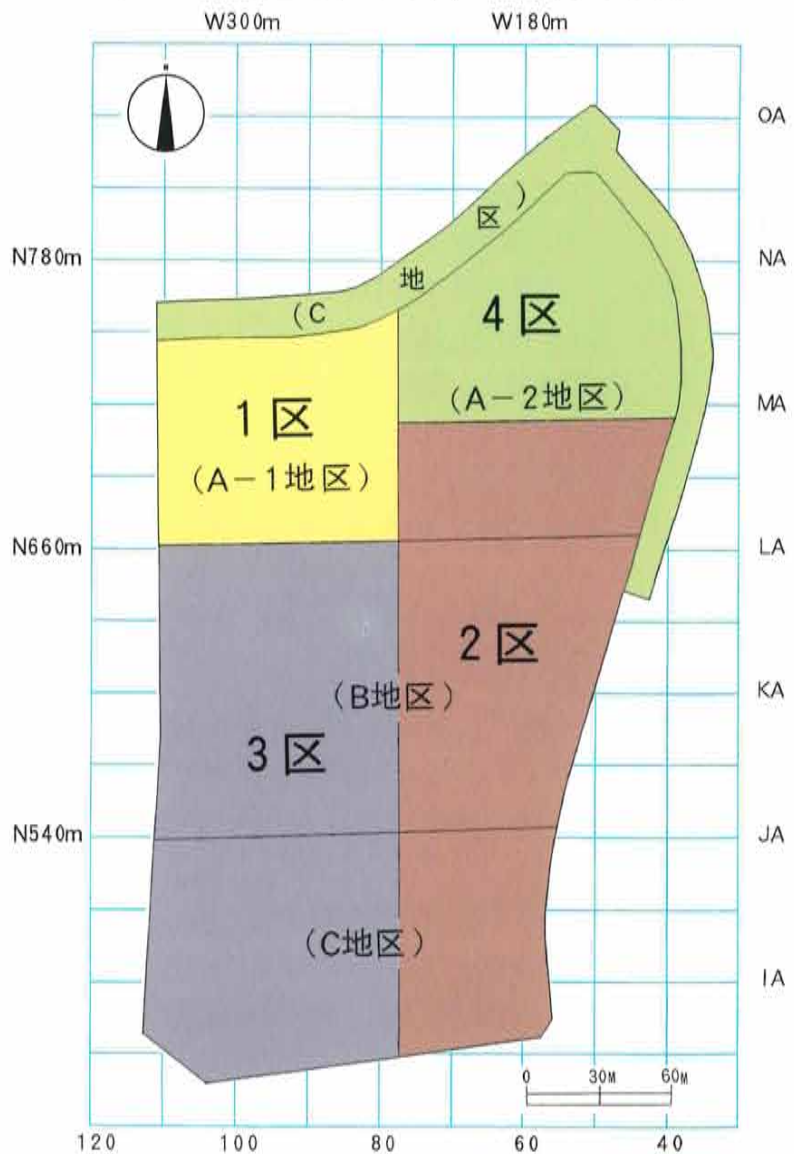
3. グリッドは、本調査区域が「武蔵国分寺跡」に含まれていることから、国分寺市遺跡調査会で設定した僧寺中軸線中心点を座標原点とする、最小単位が3×3mのグリッドを使用している。方位は、南北中軸線に対し真北が7°08'03"、磁北が0°38'03"それぞれ東偏する。

4. 調査区全体図及び遺構の実測は、1/20・1/10で行った。

5. 包含層出土の遺物の取り上げは、トータルステーションで行い、全点出土位置を記録した。

6. 写真による記録は、白黒フィルム・リバーサルフィルムで適時行った。(板野 晋鏡)

- 凡 例
- = 1区 (H5 調査)
 - = 2区 (H6 調査)
 - = 3区 (H7 調査)
 - = 4区 (H8 調査)



調査区分図及びグリッド設定図

V. 調査経過

本年度の調査経過の概略は下記の通りである。

《平成5年（1993年）》

- 11月5日（金） 仮プレハブ事務所を設置。調査区仮囲い設置作業及び草刈り作業開始。
- 11月15日（月） 重機による表土掘削を開始する。
- 11月24日（水） 表土掘削の終了した所より、歴史時代の遺構検出作業を開始する。
- 11月30日（火） 表土掘削作業を終了する。
- 12月10日（金） グリッド設定の為の杭打ち作業を行う。
- 12月13日（月） SD-5のプランを検出する。
- 12月22日（水） 歴史時代の遺構プラン全景を撮影する。
- 12月23日（木） 遺構の調査を開始する。SK-1より寛永通宝が11枚出土する。

《平成6年（1994年）》

- 1月6日（木） SD-5・3mおきにベルトを設定し、覆土の発掘を開始する。
- 1月20日（木） 歴史時代遺構の完掘状態・空中写真撮影。
- 1月21日（金） 各遺構の平面実測を開始する。
- 1月24日（月） 遺跡見学会（市立第四小学校の児童）
- 1月25日（火） 遺跡見学会（国分寺市議会議員）
- 1月27日（木） 遺構の平面実測が終了した北側からⅡ層掘削を開始する。SS-1の調査を開始する。
- 2月4日（金） 歴史時代遺構の平面実測を終了する。
- 2月18日（金） Ⅱ層掘削が終わったところから縄文時代の遺構の調査を開始する。
- 3月3日（木） Ⅱ層掘削終了。
- 3月11日（金） SS-1の調査を終了する。
- 3月12日（土） 縄文時代遺構の完掘状態・空中写真撮影。
- 3月14日（月） 各遺構の平面実測を開始する。
- 3月15日（火） 旧石器時代の調査を開始する。
- 3月28日（月） 縄文時代遺構の平面実測を終了する。
- 3月29日（火） 旧石器時代の調査坑より黒曜石のナイフ形石器が出土。拡張して調査を行う。
- 3月31日（木） 平成5年度の調査を終了する。

（板野 晋鏡）



▲ 表土掘削開始



▲ 調査風景



▲ 1月24日（月）見学会



▲ 1月25日（火）見学会



▲ SS-1調査風景



▲ 旧石器時代調査風景

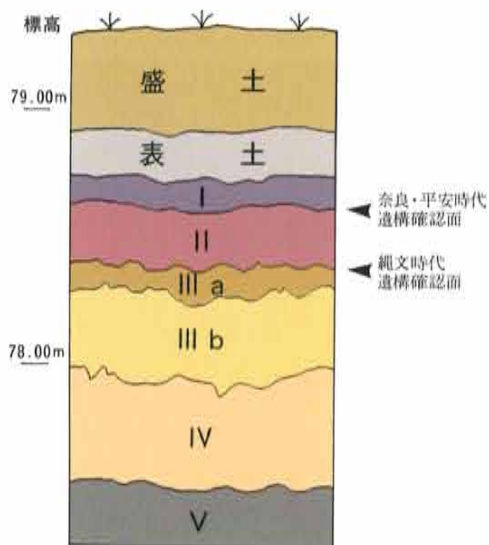
VI. 層 序

本調査地区は、武蔵野段丘面上に位置しており、地層は、礫層を基盤に、武蔵野ローム・立川ローム・褐色を基調とした2枚の遺物包含層・表土層の順に、ほぼ水平に堆積している。

本調査区の基本層序は、次のように区分される。

- 盛 土 鉄道学園造成時の盛土。調査区全体を覆っている。
- 表 土 明灰褐色土。しまりが弱く、粘性は少ない。
- I 層 黒褐色土。粘性が少なく粒子が粗い。
- II 層 暗褐色土。下部にいくほど硬く締まり粘性も強くなる。本層上面で奈良・平安時代の遺構検出を行う。縄文時代の遺物包含層。
- III a 層 明褐色土。所謂ローム漸移層。粘性が強く軟質。本層上面で縄文時代の遺構検出を行う。
- III b 層 褐色ローム。ソフトローム層。粘性が強く軟質でスコリアを含む。
- IV 層 褐色ローム。ハードローム層。粘性が強く硬く締まっている。
- V 層 暗褐色ローム。立川ローム第1黒色帯。

※ 本年度調査区（1区）の東側約1/2の部分
は、旧鉄道学園のグラウンド跡にあたるため、排水設備埋設工事等により大きく攪乱・削平されており、深い所ではIV層下部、浅い所でもIII層中部まで削り取られ、II層より上層は残存していなかった。また、西側部分においては、旧鉄道学園の造成工事によりI層は殆ど削平され、南側に僅かに残存するのみであったが、II層以下の遺存状態は、部分的に攪乱・削平されているものの良好であった。（板野 晋鏡）



基本層序模式図



▲ 土層断面写真

Ⅶ. 旧石器時代

Ⅲ. 試掘調査でもふれたように、調査区北東地点からナイフ型石器が出土している為（Ⅲ層ソフトロームより出土）、本調査区においても、旧石器時代の遺物が存在する可能性が十分考えられた。

本調査では、区内に7×7mの調査坑を数ヶ所設け、遺物・遺構が検出された場合は随時拡張して平面発掘する方法をとった。

その結果、下図◎印と★印の地点から黒曜石の縦長剥片1点・ナイフ形石器1点が、Ⅲ層上面（◎）及びⅣ層中程（★）より出土した。そのため、出土地点を中心に広範囲にわたって拡張し、発掘調査を行った。

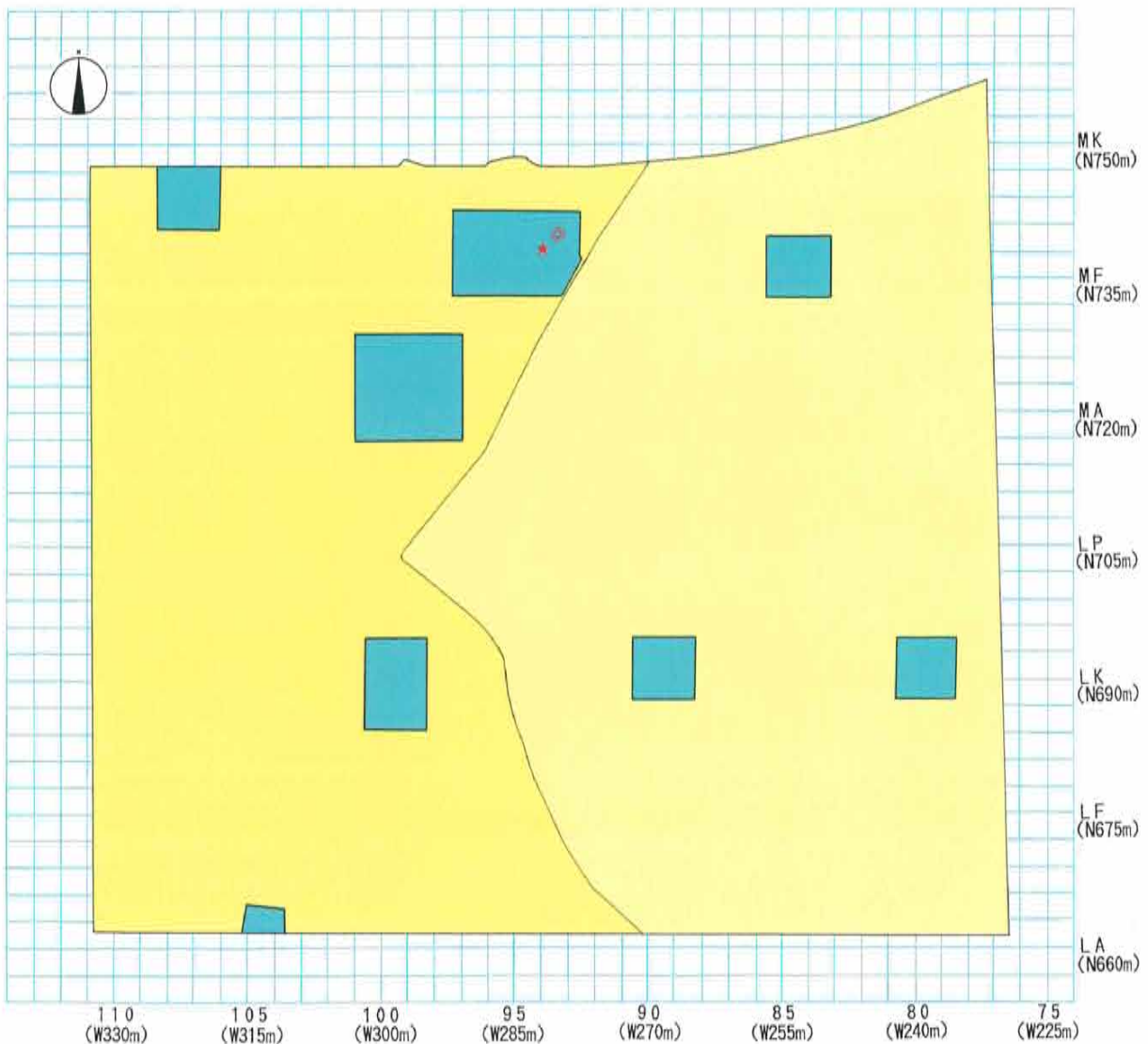
3月31日現在に於ける調査箇所は8ヶ所、調査面積は551㎡、調査区全体の6.1%に及んでいる。
（板野 晋鏡）



▲ Ⅳ層より出土した
ナイフ形石器（★）

凡 例

= 調査範囲



1区 全体図及び旧石器時代調査範囲図 (S = 1/800)

VIII. 縄文時代

本年度の調査に於いて検出された縄文時代の遺構は、集石（SS）2基、土坑（SK）33基、特殊遺構（SX）1基、小穴（P）130個である。土坑の内3基は、所謂「陥し穴」と思われ、調査区北壁沿いに2基（SK-23、SK-35）、東壁沿いに1基（SK-32）検出された。その他の土坑は、形状、配置に統一性及び規則性はみられず、用途も不明である。集石は、調査区中央部に1基（SS-2）、南西部に1基（SS-1）検出され、いずれもⅡ層の上面に於いて確認された。調査区中央部で検出された特殊遺構1基（SX-7）は、Ⅲ層上面で確認され、詳細は後記するが、縄文時代早期の不整形堅穴状遺構と考えられる。



▲ 調査風景



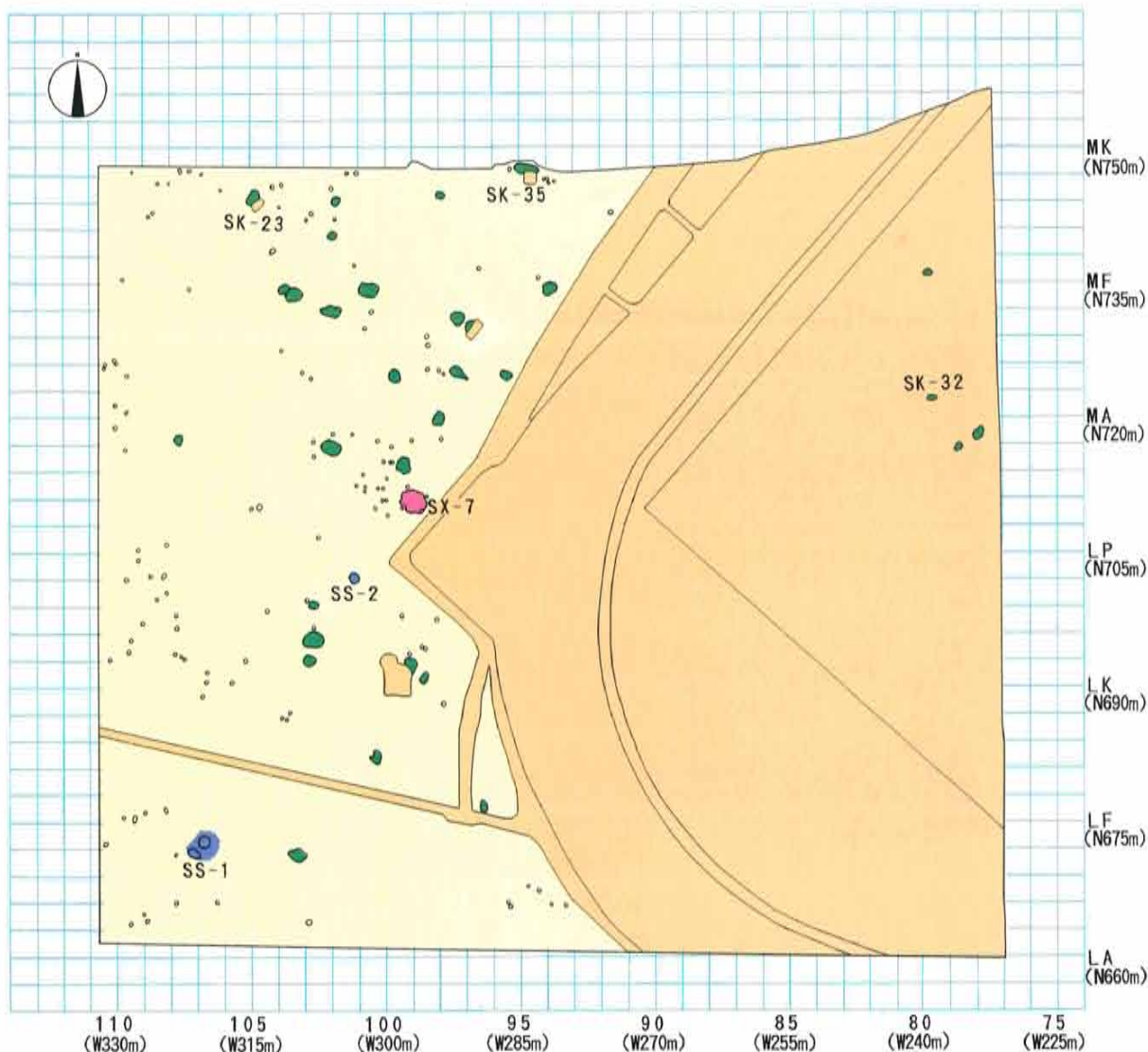
縄文時代完掘全景

表土・I層・II層中より出土した遺物は、土器片約400点、石器約30点である。土器は、縄文時代中期の土器（五領ガ台・貉沢・阿玉台式）が主体をなし、その他、早期の東山式（滝坂式）土器が若干出土している。石器は、石鏃8点、打斧4点、磨石5点、スタンプ型石器15点等である。

尚、遺構・遺物の大半は、調査区西半分より検出・出土したものであり、東半分にも遺構・遺物が存在していたと思われるが、旧学園のグラウンド跡にあたるため、大きく攪乱・削平されており深く掘り込まれている土坑4基を検出するにどまった。

凡 例

- = 集石(SS)
- = 土坑(SK)
- = 特殊遺構(SX)
- = 小穴(P)
- = 攪乱



縄文時代遺構配置図 (S=1/800)

SS-1

調査区南西、LE107グリッドに位置し、Ⅱ層上面に於いて検出された。一部攪乱をうけているが、直径約4.4mのほぼ円形の範囲内に礫が集中しており、その中に数点の土器片が散在していた。礫の大半は破碎礫であり、赤化している礫も多数あった。(写真左上) 出土した土器は、縄文時代中期阿玉台I a式土器である。

集石下に存在する土坑は、最初の検出面に於いては確認出来なかったが、遺物を取り上げた後、更に掘り下げて検出作業を行った結果、最初の検出面から約20cm掘り下げた面において、南北に2基の集石土坑が確認された。(写真右下)

北側の土坑は、直径約1.3mのすり鉢形を呈し、確認面からの深さは約0.4mを測る。礫は、坑低面から約5cmの部分まで充填されており、その殆どが破碎礫であり、赤化していた。また、少量の炭化物及び焼土が検出された。南側の土坑は、長軸1.4m、短軸0.7mの不整楕円形を呈し、深さは0.2mを測った。礫は上部にのみ充填されており、北側の土坑同様、殆どが破碎礫で赤化していた。いずれの土坑からも、土器の出土はなかった。



▲ 調査風景



▲ 北側土坑断面



◀ 第1確認面全景

土坑検出状態 ▶



SK-23

調査区西側北壁沿い、M I 105グリットに位置し、II層下面に於いて確認された。南壁上部は、現代の攪乱により破壊されているが、遺存状態は全体的に良好である。

形状は、南にやや傾きをもつ長軸が東西方向の楕円形のプランを呈し、長軸1.6m、短軸1.0m、確認面からの深さ約1.05mを測る。北・南壁は、深さ約0.3mの部分からほぼ垂直に、東・西壁はややオーバーハングし乍ら掘り込まれており、底面は長方形を呈し、平坦になっている。また、底面中央部から直径約6cm、深さ28~35cmのピットが3個、東壁下から1個検出された。

遺物は、覆土中から縄文時代早期東山式（滝坂式）の土器片が3点出土した。いずれも流れ込みによるものである。

この土坑は、形態及び底面で検出されたピットなどから考えると、所謂「陥し穴」であると思われる。



▲ 完掘全景



▲ ピット検出断面



▲ 上層完掘全景



▲ 下層断面

SK-35

調査区北壁沿い、M J 96~95グリットに位置し、III層上面に於いて確認された。

形状は、東西方向に長軸をもつ長楕円形を呈し、長軸は3.0m、短軸は1.1m、確認面からの深さは0.57mを測る。底面は、長軸3.0m、幅0.2mを測り、平坦であり、南北壁は、直線的でほぼ垂直に立ち上がっている。

底面からピットは検出できなかったが、形状等から考えると、この土坑もSK-23と同様に「陥し穴」であると思われる。

覆土は、基本的に2層に分かれている。上層は、II層土主体で自然堆積である。下層は、ロームが主体で少量のII層土がブロック状に混入している。上層と下層との境目には、踏み固めたとと思われる面が確認されており、下層については、埋め戻しを行い構築された可能性が考えられる。

尚、この土坑は短軸の幅が非常に狭く、土層の堆積状態及び断面の形状を明確に観察する為には半裁掘削が困難であると思われた為、地山ごとスライスをして調査をする方法をとった。

SX-7

調査区中央部、L0100グリットに位置し、Ⅲ層上面に構築されている。

形状は、不整な円形を呈し、直径約3.3m、確認面からの深さ0.2mを測る。底面は、中心部に向かって僅かに傾斜しているが、全体的にはほぼ平坦である。壁沿いには、円形の対角をなす四隅の位置からピットが4個検出された。直径は10~15cm、深さは20~30cmである。また、周辺部西側にも遺構を取り巻くようにピットが数個検出されており、配置に特別な規則性こそ見られなかったが、遺構に伴うピットである可能性が考えられる。覆土は、自然堆積で基本的に2層に分かれる。

遺物は、土器片が1点、及びスタンプ形石器・石皿の破片・磨石等が覆土上部から出土した。土器は、縄文時代早期東山式（滝坂式）土器である。

尚、現調査段階では、この遺構の性格を明らかにするのは非常に難しいが、形状及び壁際・周辺部に位置するピットの存在、出土遺物等から、縄文時代早期の不整形竪穴状遺構と考えておきたい。



▲ 遺物出土状況



▲ 完掘状態

小穴（P）

小穴は、調査区西側から130個検出されたが、いずれも形状及び配置に特別な規則性・連続性は見られず、木根跡と思われるものも少なくなかった。

（板野 晋鏡）



▲ ピット調査風景



▲ ピット調査風景



▲ 調査風景



▲ 縄文時代(早期・中期)の土器 (S=1/2)



▲ 縄文時代の石器 (左 石鏃はS=1/4, その他はS=1/4)

IX. 歴史時代

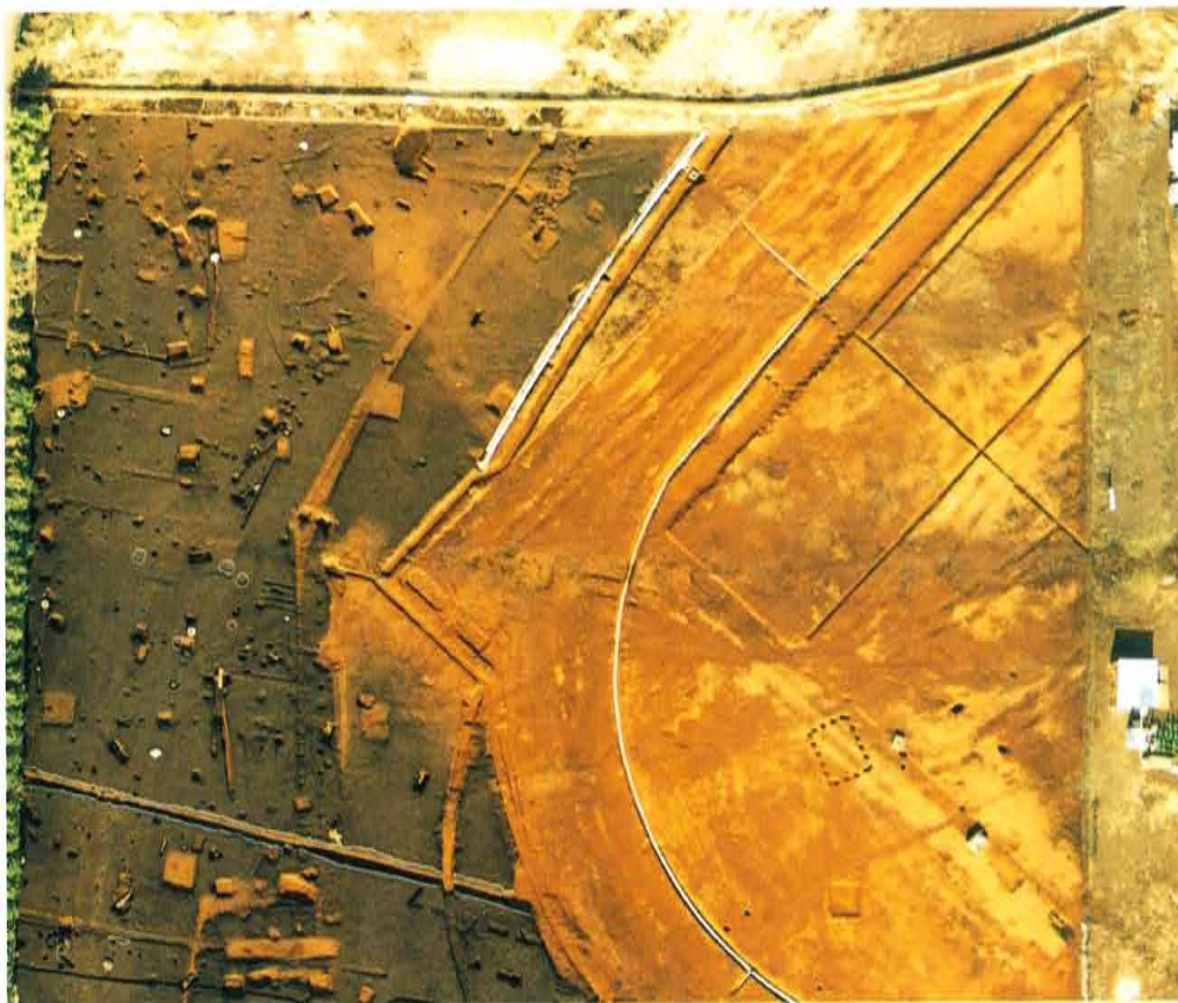
層序において触れられているように今年度調査区（1区）東側約1/2がⅢ層まで削平されており、西側約1/2部分が歴史時代の調査対象となった。

概ねⅡ層の上面で遺構確認作業を行い、その結果溝跡10条・土坑20基・特殊遺構7基・小穴20基が調査対象地区よりほぼまんべんなく確認された。

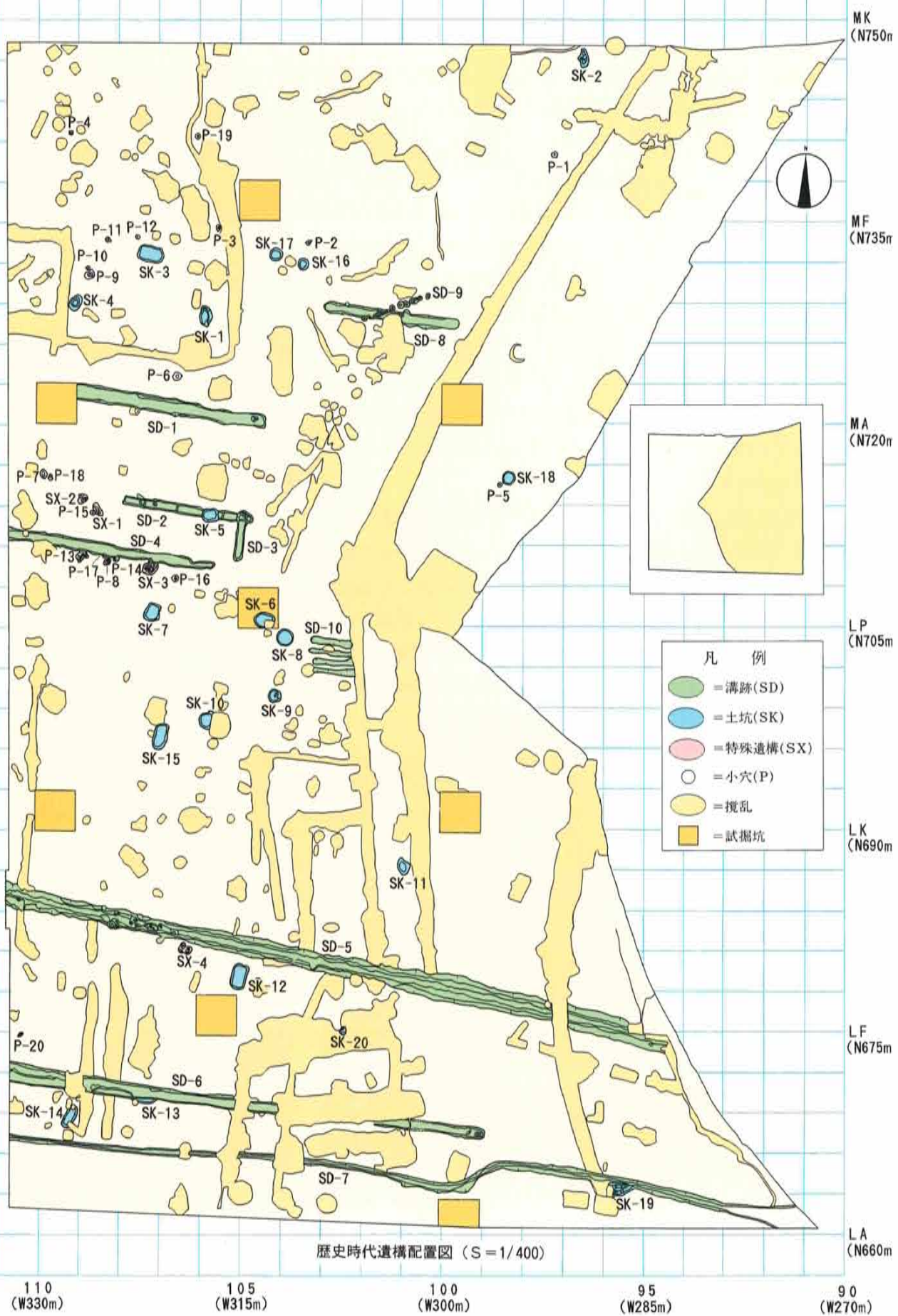
歴史時代の遺物については表土・Ⅰ・Ⅱ層・攪乱の中等より常滑の甕の口縁部1点・龍泉窯と思われる青磁片1点他、数点中・近世の遺物が今のところ確認されている。またSD-5の覆土上面より女瓦が数点出土している。その他に出土遺物を伴う遺構も数基あるが出土状況等は今後の検討を要する。



▲ 歴史時代調査風景



▲ 歴史時代完掘全景



歴史時代遺構配置図 (S=1/400)

110 (W330m)

105 (W315m)

100 (W300m)

95 (W285m)

90 (W270m)

MK (N750m)
 MF (N735m)
 MA (N720m)
 LP (N705m)
 LK (N690m)
 LF (N675m)
 LA (N660m)

溝 跡

II層より確認できた溝跡は、SD-3・9を除き概ね東西溝である。これらは断面の形状などによりおよそ3タイプに分類でき、茶褐色主体と黒褐色主体の覆土の2タイプに分類される。

SD-1・2・3・4・6・8は断面はなだらかな弓状で、覆土が明茶褐色1層よりなり、しまりが強く、確認面からの深さが5~15cmで上面幅が0.5~1.2mにおさまる。

SD-7・9は断面U字状で確認面よりの深さはそれぞれ約25cm・45cm・上面幅が約60cmである。覆土はやはり明茶褐色土が主体となる。SD-7の覆土よりは中世陶器片と思われるものも出土しているが、出土状況等検討を要する。

以上の溝跡は断面の形状は異なるが、いずれも覆土は茶褐色土を主体としたものである。

SD-5は調査区南西に位置し北に約10度傾く東西方向の溝である。上面幅約1~1.6m・底面幅約0.2~0.5m・確認面からの深さ約0.4~0.8mを測る。覆土は黒色土を主体とした自然堆積層で底面に硬質面は見られない。断面は底面が狭い逆台形である。今回の調査では約50m確認されたが東西ともに延びるとの思われ、なんらかの区画溝の可能性はある。



▲ SD-5 遺構発掘全景



▲ SD-1 溝跡断面



▲ SD-7 溝跡断面



▲ SD-5 溝跡断面



▲ SD-5 溝跡断面

土 坑

今のところ明確に土坑に伴う遺物を出土しているのはSK-1・2の2基である。ほかの土坑では覆土中よりSK-3・5・7・9・13・17・18で遺物が出土しているがいずれも石等であり時期や用途は不明である。また、平面形が円形・楕円形・方形・不整形のものがあり規模も様々であり、特に配置等に規則制は見られないようである。しかし、覆土は表土に近い明褐色系を主体にしたものと、I層に近い黒褐色系を主体にしたものとに分かれ、ある程度覆土の色調によって分類出来る可能性がある。

以下に遺物が出土したSK-1・2および形態の異なる土坑について記述する。

SK-1

調査区の北西、MD106グリッドに位置する。平面形は不整形で長軸139.2cm・短軸97cm・確認面からの深さ20cmを測る。壁はなだらかに外側に向かって立ち上がる。覆土は黒褐色土とII層土の混じりで、当初攪乱と思われた。

底面近くより寛永通宝11枚と切羽1点が出土し近世の土坑墓と思われる。



▲ SK-1完掘全景



▲ SK-1遺物出土状況



▲ SK-1調査風景



▲ SK-1遺物出土状況

SK-2

調査区の北壁よりのMH97グリッドに位置する。平面形は不整形で長軸で135cm・短軸66cm・確認面からの深さ66cmを測る。覆土は明茶褐色土主体の自然堆積層でロームブロックを多く含む。覆土の中よりハウロク片が2点出土しており近世以降の土坑と思われる。



▲ SK-2完掘全景

SK-4

調査区の北西MD109グリッドに位置する。平面形は楕円形に近く長軸112cm・短軸83cm・確認面からの深さ42cmを測る。壁は緩やかに外側に開き、底面が狭い。覆土は明褐色土の自然堆積層である。



▲ SK-4完掘全景

SK-6

調査地区のほぼ中央のLO105グリッドに位置し試掘調査時に奈良・平安時代の土坑として確認されている。平面形は楕円形に近い長方形で長軸139cm・短軸101cm・確認面からの深さ8cmを測る。覆土は黒褐色土1層からなりII層ブロックを含み粘性は無くしまり強い。



▲ SK-6完掘全景

SK-14

調査区の南LC110グリッドに位置する。平面形は長方形であるが部分的に攪乱を受ける。長軸176cm・短軸86cm・確認面からの深さ10cmを測る。覆土は黒褐色土でII層粒子を含みしまり強い。



▲ SK-14完掘全景

SK-16

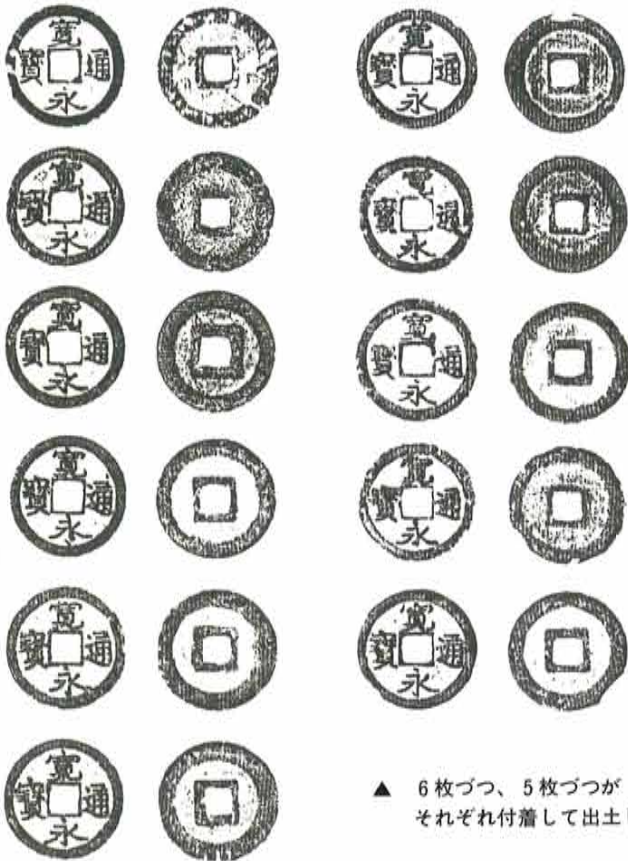
調査区の北側MD104グリッドに位置する。平面形はほぼ円形である。幅はおよそ70cm~75cm・確認面からの深さ20cmを測る。覆土は明茶褐色でII層ブロックを多く含みしまり強い。
(滝島 和子)



▲ SK-16完掘全景



▲ SK-1より出土した寛永通宝・切羽・古銭が入っていた袋 (S=1/4)



▲ 6枚ずつ、5枚ずつがそれぞれ付着して出土した。



上 中・近世の遺物 (S=1/2)
下 SD-5より出土した瓦 (S=1/3)

X. 道標銘のある地蔵碑

調査地区の西側フェンスの植え込みの中に倒れた状態で発見されたもので、頭部及び底部の一部が欠損しているが現在高約50cm、幅24cm、厚さ16cmを測る硬砂岩製の石塔である。角柱型をしており、正面及び左右の両側面は表面を研磨して成形している。背面は中央をへこませてタガネで整えている。台座は発見されず、碑の底部が一部欠損しているため、台座に乗っていたか否かは断定できない。

銘は、

(左側面)

村々志
多摩郡恋ヶ久保村(以下欠)
願主坂本重郎右ヱ門

(正面)

南無地蔵尊
文化十三年丙子年
四月 日 国分寺

(右側面)

左 右
こくぶんじ(以下欠)
ち(以下欠)



この石塔は、造立当初の場所に立っていたものではなく、かつての鉄道学園の造成工事の際に場所が移動されているようである。しかし、大正10年測量の2万5千分の1地形図によると、本遺跡調査区のほぼ中央を府中街道から分かれた小径が国分寺村に向かって通っており、その分岐点(次頁の地図の矢印の所)と本碑が発見された場所はさほど離れてはいない。この場所は、恋ヶ久保村と国分寺村の境近くにあり、恋ヶ久保村の村民の志をまとめて坂本重郎右ヱ門が願主となり

建てたのであるから、当然碑の正面は恋ヶ久保村に向けて北東向きに立てられたはずで、そうなる道標銘は碑の北西面にあって、分岐点から正確にそれぞれの道の方向を案内している。したがって、本碑は発見された場所近くにあった、この分岐点に建てられたものと考えて良からう。尚、この小径は、旧鉄道学園の造成工事で消滅したらしく、今年度の調査区(1区)では確認できなかった。

一般に、江戸時代の道標は、本来の道しるべとして道案内だけを目的として立てたものと、他の目的で立てた石仏・石塔類に道案内の銘文を併記したものとがある。本碑は後者に属するものであり、正面に「南無地藏尊」と文字を彫って地藏菩薩を祀り、側面に道標銘を併記している。この道標銘は、他の2面に彫られた文字とタガネや書体が同じであることから、後から追刻されたものではなく造立当初から併記されていたものである。ただ、地藏菩薩を祀る場合には、地藏像を陽刻して石仏として造立するのが自然であり、本碑のように文字で表現したのは、道標としての目的を強く意識していたために、角柱状の石塔という形をとり、地藏菩薩を祀ることと道案内とを兼ねたのであろう。このよう

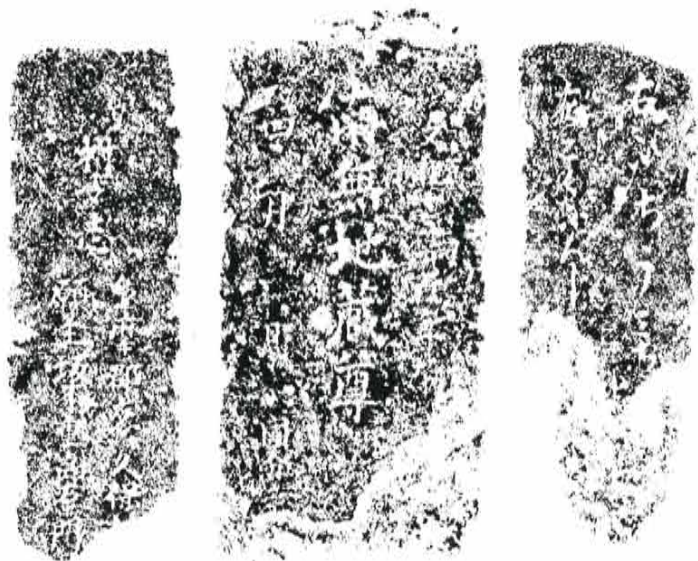


に道案内と宗教が結びつくのは、道案内をすることは、困っている人を救うという宗教的な満足感に通じることであり、道案内標識を立てることによって功德を得ようとする信仰心と、同時に村境に地藏菩薩を祀ることで村内の安全を祈願し人々の苦しみを救ってほしいという願いを込めるといふ二重の意味があるのであろう。

多摩地区の道標は、石仏や石塔に併記したのものが多く、府中市教育委員会発行の『府中市の石造遺物』には、江戸時代に立てられた道標として8基が載っているが、庚申塔4基、馬頭観音塔3基、回国供養塔1基であり、いずれも宗教的な石造物に道標銘が併記されているものである。これらの道標銘の内容は「これまさ道」「かうしうみち」「かわごへみち」のように、行き先を表したり、街道名である場合もあるが、「やくしみち」「子の権現道」「ふじ 大山 道」のように宗教関係と思われる行き先も多い。また立っている場所は、村の辻や街道の辻であり、庚申塔や馬頭観音が立てられる場所と一致し、こうした宗教的な石造物が道標としての役も果たしているのである。青梅市

教育委員会発行の『青梅市の石仏』によると72基に道標名が記されており、その行き先を見ると、御岳山関係31基、秩父関係15基、子の権現9基である。また、石仏など宗教的な石造物に併記されたものではなく、純粹に道標として作られたものが25基ある。

(持田友宏)



XI. 総括

旧国鉄所有地であった中央鉄道学園跡地は、JR中央線西国分寺駅南東に広がる32万㎡を越す、広大な敷地である。今般そのうちの西側地区6.7万㎡を調査することになった。

中央鉄道学園跡地は、全域を武蔵国分寺遺跡として周知されているが、その北西域は縄文時代早期と中世の遺物が発見されている日影山遺跡が重複している。

すでに昭和53年に新幹線実習庫建設工事に伴って、南端地域の調査が実施され、10世紀代の竪穴住居跡が9軒検出されている。また、昭和59年には下水道敷設工事に伴い敷地中央部付近の調査が行われた。結果は竪穴住居跡はなく、土坑と若干の溝が検出された程度である。

この二度に亙る調査で武蔵国分寺遺跡北方域の情勢がかなり明らかになって来た。それは府中市域北端で行われた武蔵国分寺関連遺跡の調査で武蔵国分寺南方地域の様相が明らかにされて来たことと連動して武蔵国分寺遺跡の南北領域の限界とその様相を明らかにすることとなった。

今回の調査は敷地の西方域ということであるが、武蔵国分寺遺跡の北端推定地域からJR中央線付近まで北側に300m以上の間の調査である。国分寺市が実施した試掘調査でも、奈良・平安時代の遺物が点々と出土している。近年話題を呼んでいる東山道武蔵路推定路線も調査地区東端を南北に貫いており、武蔵国分寺遺跡外郭地域の様相が明らかに出来る点に期待される。

今年度の調査区は西北地域9,091㎡である。調査内容は前記した通りである。その中で日影山遺跡に関係するものは縄文時代早期初頭の無文土器とスタンプ型石器、中期初頭の土器群である。前者には竪穴状の落ち込みが伴い、後者には集石遺構が検出された。共に遺跡の中心地域からは大きく外れており、遺跡外郭地域に点在する小遺構として理解したい。ちなみに撚糸文終末期の拠点集落としては武蔵台遺跡が近隣に所在する。中期初頭の集落は恋ヶ窪南遺跡が本調査地の東500mに所在する。特に中期初頭の遺物は、遺構を伴わない土器片だけの若干の散布、一基ないし数基の集石と若干の土器片の散布など、奈良・平安時代の武蔵国分寺遺跡の調査に付随して、かなり広範囲に亙って発見されており、本遺跡の事例も含めて拠点集落の分析と共に広域的な集落論を考える上で貴重な資料の発見と言わねばならない。

中世の遺物は常滑風の陶器、青磁片などが若干見受けられる。おそらく隣接する恋ヶ窪廃堂跡、西側を南北に貫く鎌倉街道等の関係であろう。

近世の遺物では、文化13年の記年銘のある地藏碑がある。敷地内の一角に片付けられたような状態で放置されていたのを採集したものである。近年石造遺物の湮滅が多い中で幸いであった。そのほかに寛永通宝11枚と銅製の切羽が1点出土した土壌がある。骨片状のものが一緒に出土しているが細片のため分析を待ちたいと思う。

調査の主眼である国分寺遺跡に関連する奈良・平安時代の遺構は、SD-5とした構跡がある。調査区南側に東西方向に伸びている。東側は旧グラウンドのため削平されているが、確認された全長は50mである。国分寺跡の中軸線に対しては幾分傾きをもっているが、同時期であることは、覆土の状態、数点の瓦の出土から見ても間違いではないだろう。

今後調査地区を南に掘り進めて行く中で、この溝の位置付けも明らかにされるであろうし、国分寺遺跡の外郭地域の様相がより鮮明になってくるものと期待される。(早川 泉)

西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

会	長	秦 正博	東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財副参事
副	会 長	天野 稔	国分寺市教育委員会文化財課長
理	事	坂誥 秀一	東京都文化財保護審議会委員（立正大学教授）
		永峯 光一	東京都文化財保護審議会委員（国学院大学教授）
		藤間 恭助	国分寺市文化財保護審議会副委員長
		清水 文夫	東京都住宅局建設部推進課副参事
		水戸 信雄	東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発担当課長
		木野下藤司	住宅都市整備公団東京支社住宅事業一部企画用地課長
		吉永 文夫	国分寺市開発第二部事業推進課長
監	事	本藤 圭孝	東京都住宅局建設部推進課開発係長
		佐々木徳明	国分寺市開発第二部開発業務課長
事務局			
事	務 局 長	和田 利昭	調査会職員
事	務 局 員	夏目みね子	調査会職員
調査団			
団	長	坂誥 秀一	立正大学教授
顧	問	永峯 光一	国学院大学教授
顧	問	吉田 格	国分寺市遺跡調査会団長
参	与	早川 泉	東京都教育庁文化課学芸員
参	与	持田 友宏	青梅市立郷土博物館嘱託
主	任 調 査 員	板野 晋鏡	調査会職員
調	査 員	滝島 和子	国分寺市教育委員会嘱託職員

（平成6年3月31日現在）

発掘参加者

梅田嘉美 宇田川貴史 熊田 悟 円谷 猛 月村桂子 久保木京子 友寄英治
 稲垣 浩 飯島明美 石田倫子 井上富裕 岡部智子 桶田弘子 亀山靖人
 鴨志田静男 山田 進 児玉紀子 高橋洋子 塚田達也 附柳勇喜 寺原千恵子
 得能良助 長崎 稔 平賀義則 丸山りえ 水野洋介 水村 歩 村松弘二
 吉田圭一 外山浩二 森 良子 秋池勝利 新井 晋 井上善幸 岩田輝穂
 岩本重規 遠藤清登 太田昌興 甲斐文治 鬼島ちあき 木村裕昭 小林智之
 小山正利 島倉千絵子 杉浦健治 中川洋美 野崎卓也 藤森賢治 増沢信二
 山田輝生 吉田 暁 吉塚由香 高橋はるみ 村木眞弓

整理参加者

渡辺淳子 入江たか子

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

西国分寺地区（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）
特定住宅市街地総合整備促進事業に伴う
平成5年度発掘調査概報Ⅰ

平成6年3月31日

編集 西国分寺地区遺跡調査団

発行 西国分寺地区遺跡調査会
東京都国分寺市泉町2-1
☎ 0423-25-1767

印刷 神田印刷株式会社
